婦人衛生雑誌

大正五年七月二十日發行

第三百二十號

明治二十一年十二月二十八日内務省許可（毎月廿日發行）

婦人衛生雜誌 第三百二十號目次

講演

○夏の衛生 醫學士 中山敏樹

叢談

○夏の衣食住 莊司秋次郎
○胃潰瘍の話 醫學士 篠原昌治
○精神と身體の健康(七) 醫學士 渡邊房吉
○ニキビの話(上) 賀川哲夫

育兒

○詐病の話 ドクトル 三田谷啓
○水泳の注意
○寢冷え

家庭衛生

○飼猫に就て
○下痢患者の取扱

抄録

○夏の飯
○梅干の殺菌力
○女子の肉體美

雜報

○女理學士
○名譽の寶冠章
○女裝の壯丁

廣告

○私立大日本婦人衛生會例會
○新潟支會地久節祝賀及海水浴場開設
○入會及轉居

稟告

来る八月及び九月の例會は本會規則に據り
例年の通り休會致候也
暑中特に會員諸姉の健康を祈る

大正五年七月

私立大日本婦人衛生會

私立 大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんことを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれは此生活を得んこといと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〱衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして特に婦人のもつばら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に賀ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるもの、如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し尚之を筆記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす玆に本會旨趣の梗概を敍べて廣く江湖の諸貴姉に告げ其贊成を仰ふぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立 大日本婦人衛生會規則摘要

（明治卅二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員證を交付す（交付手續は第五條に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を賛成する者は之を贊員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員三十名、內書記若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は二箇年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る　幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　臨時指名委員の件●第十四條、會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす例會は八九月を除く外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二同會員相互親睦の爲め開遊會を開くことあるべし●第十七條　毎會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑託し會員をして隨意聽講せしむるものとす●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は總て質素たるべき事）●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁ず●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと●第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算竝に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす●第廿七條　支會には支會限りの會費を置くことを得●第廿八條、本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其會費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし●第卅條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは寄贈物品等を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄附者の姓名及品目を簿冊に登錄し尚本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送發として別に遞信料を添へらるべし（郵券送一割增）●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし振替にて口座番號東京一〇六〇〇番本會事務所宛に申出しあるべし●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢く會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議員會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麹町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌第三百二十號
（大正五年七月二十日發行）

講演

夏の衛生

醫學士　中山敏樹

本日は婦人衛生會の例會を御開きになりまして、不肖なる自分にも何か御話を申上げるやうにと云ふ御依頼を受けまして、自ら不肖をも顧みず敢て皆様に何か御耳に入れたいと思ふ次第であります、私の今日擇びました演題は「夏の衛生」と云ふことでありまして、極めて平凡な題であります、從つて又其内容も極めて平凡であつて、私の申上げるまでもなくあなた方も既に御承知のことが多いだらうと思ふのでありますが、兎角吾々のことは皆能く承知して居ることに屢々不注意に了ると云ふことが多いのでありまして、且又時節柄のことでもありますから時に「夏の衛生」と云ふ題を設けまして、暫くの間皆様の御清聴を煩はしたいと思ふのであります。

今日は斯う云ふ風に天氣も晴れて、非常に夏景色の好い天氣でありますけれども、段々是からして梅雨の候になりますと、毎日降り續くところの雨で非常に陰鬱な天氣になつてくる、朝の中には袷を著て居るかと思ふと午後からは單物を出さなくてはならぬ、夜になると綿入羽織が必要であると云ふやうな風に、極めて不順な氣候になつてくるのであります、此不順な時候、即ち梅雨の時節が極めて吾々の身體に害の多い時であります、一年中で申しますならば梅雨の時期が最も人間の不健康に陥り易い時期であります、それでありますから此時期は最も注意をしなければならぬのであります、雨が降り續くと云ふと氣候が非常に濕潤してくる、又一方には氣

候が非常に暑くなり一方には空氣が濕潤してくると云ふために、皆樣も御承知の通り有機物の發生が非常に旺んになつてくるのであります、即ちいろ〳〵な黴が生えてくる、其黴が食物などに著くと云ふと食物を容易く腐敗させる、斯う云ふ風に黴が空氣の中に飛散して吾々の肺の中に這入り氣管の中に這入ると云ふ風な事からして、いろ〳〵の疾病を起してくるのであります、殊に此夏の養生といたしましては多くは飲食物から吾々の身體に害毒を及ぼしてくるのでありますから、從つて夏は衛生と云ふことに最も注意しなければならぬと云ふのは、即ち口から這入るところの病毒を防がなければならぬのであります、是が一番肝要なことであります、それで單に夏の衛生と申しましても、言葉を換へて言ひますれば如何にして吾々が梅雨の候からして夏の酷暑にかけて身體を健康に丈夫にするかと云ふことが、即ち夏の衛生にごく必要なことであります、それには二つの方法があります、今申上げた通り身體の外からして身體の内へ這入るところの總ての害毒を防ぐと云ふことが必要な方法であります、それから又一面に於きましては今まで丈夫であつたところの身體を夏にかけて一層强壯にすることが、夏の衛生の第二に必要なことであります。

さう云ふ風で第一の必要といたしましては、即ち身體の外から身體の内へ害毒が這入ることを防がなければならぬのであります、此梅雨から夏にかけて極めて物が黴び易い、黴菌が殖え易い、即ち黴であるとか細菌であるとかと云ふやうなものが、最も發生し易い時期でありますから、此時期には殊に注意して口から這入るところの病毒を防がなければならぬのであります、それで口から這入るところの病氣、即ち夏になると云ふと、只今申上げたやうな關係からして口から病毒が這入つて病氣を起すと云ふことが多いのでありますが、此中で最も恐るべきところの病氣は皆樣も御承知の傳染病であります、例へば腸窒扶斯とか赤痢とか或は虎列剌とか或は小兒に多

い疫痢であるとかさう云ふ風な各々特有の黴菌に依つて起るところの多く腸を損ねてくる病氣が一番恐ろしいものであります、單に傳染病ばかりでなく其外胃を毀はしたり腸を毀はしたりすることは、冬よりも寧ろ夏に多いのであります、それでそれ等を吾吾が防ぐには食物なり飲料なりを充分に選擇しなければならぬと云ふ必要が起つてくるのであります、それで此恐るべきところの窒扶斯なり赤痢なり虎列刺なりと云ふ風な病氣に就て、極く簡單にどう云ふ風に吾々の身體に這入つてくるかと云ふことをお話して見やうと思ふのであります。

窒扶斯であるとか或は赤痢であるとかと云ふ風な疾病は、各々特有の黴菌があるのであります、即ち赤痢には赤痢菌、腸窒扶斯には窒扶斯菌と云ふやうな特有の黴菌がありまして、それ等が或方法に依つて吾々の身體に這入り込んで來るのであります、其這入り込んで來る門戸は多くは口から這入つて來るのであります、でそれならば其赤痢の黴菌と云ふものは、どう云ふ風な力を有つて居るか、それ等を少し玆で御話して見たいと思ふのであります、例へば赤痢の黴菌でありますれば、其赤痢菌が空氣中から空氣傳染に依つて吾々の身體に這入ると云ふことはなく、多くは水であるとか或は野菜物であるとか云ふやうな食物の中に混じてくるのでありますが、其赤痢の黴菌は腸窒扶斯の黴菌と比べますと、比較的抵抗力が弱いのであります、例へば赤痢の黴菌が大便の中にありますと、それは大抵二日位は生きて居るのであります、或は又生な肉であるとか或は普通の水でありますと、其中に赤痢菌がありますれば大抵は一週間位は其中で生活して居るのであります、それから今日のやうに極く日光の光線の強い所に曝すと云ふと、大抵は三十分位で死んでしまう、或はさう云ふ風な赤痢菌を煮沸しますと大抵四五分位で死んでしまう、それから寒い時は赤痢菌の發生が長いのでありまして、一ヶ月或は二ヶ月位其黴菌が生きて居るのであります、それから今度は赤痢の黴菌に

藥を用ゐる、卽ち二百倍位の石炭酸を用ゐますと大抵六時位で死んでしまう、尙強い石炭酸を百倍位のものでありますと三十分で死ぬ、或はもつと強い二十倍の石炭酸或は千倍の昇汞水を赤痢菌にかけますと大抵は直ぐ死んでしまうのであります、腸窒扶斯菌でありますと赤痢菌よりも少しく抵抗力が強い、例へば水を煮沸してすつから殺菌しました水の中でありますと大抵三週間四週間位は窒扶斯菌が生きて居る普通の水の中でありますと外の黴菌が這入つて來て其黴菌が增殖してくる、其黴菌の壓迫を受けて腸窒扶斯菌は割合に死に方が早いもので、大抵は二週間で死んでしまうものであります、それから川の中の水でありますと、溜り水の中に湧いて居る腸窒扶斯の黴菌より早く死んでしまう、例へば川であるとか井戸であるとかと云ふやうな水の中に居れば大抵二週間或は三週間四週間位までは生きて居ることが出來るのであります、それで近頃はさう云ふ風な傳染病に掛つて死んだものは悉く火葬にしてしまひますけれども、若し誤つてそれ等の死體を埋めるやうなことがありましたならば、其死體の中に於て腸窒扶斯菌が長く生きて居る、或は三ケ月四ケ月時に依ると半年位生きて居ることがあります、それから大便の中に於ても此窒扶斯菌が四ケ月位生きて居ることが出來るのであります。

さう云ふ風に今まで申上げましたのは、赤痢とか或は窒扶斯とか云ふものだけに就て御話したのでありますが、さう云ふ風な黴菌が吾々の身體に這入つても腸窒扶斯なり赤痢なりと云ふ病氣を直ぐ起すものでないのであります、是等の黴菌が吾々の身體に這入りますと、或一定の時間或一定の時日の間は身體の中に隱れて居ります、それを吾々醫者の言葉で申しますと潛伏期と申して居りますが、さう云ふ風に身體の内に潛伏して居つて、一定の時日が經ちますと初めて吾々の身體に病症を起すのであります、ところが人の體質によりますと其窒扶斯なり赤痢なり或は虎列剌なりの黴菌が身體の内に這入つても病氣

を起さない人があります、それを吾々醫者の言葉で申しますと菌携帶者と云ふのでありますが、さう云ふ風に窒扶斯の黴菌なり赤痢、虎列剌の黴菌が這入つても少しも病症を起さない、即ち赤痢なり虎列剌なりの黴菌を身體の中に抱いてさうして平氣であちらこちら歩き廻ると云ふ人があります、それは其人の身體の中に黴菌が這入つても其黴菌が沈默して居つてさう云ふ病氣に罹らないのであります、それでさう云ふ人は極めて幸福でありますが、其人の便の中には矢張り赤痢の黴菌窒扶斯の黴菌があつて、其人があちらこちら歩いて傳播するのでありますから、最も注意をしなければならぬ危險な人物であります、曾て斯う云ふ例があります、先年虎列剌のちよつと流行いたしました事があります、虎列剌が或ところに起りますと、健康の者でも其周圍の者の大便だけは警視廳で悉く調べて居る、さうして若し其中に虎列剌の黴菌があるものは、假令病氣を起さなくても病院に隔離して一時警戒をすると云ふことになつて居るのでありますが、恰度虎列剌の起りました時は或魚屋の亭主の大便を警視廳から行つて調べたところが、其中に虎列剌の黴菌が一ばいにある、そこで警視廳の役人がお前は病院に這入らなければならないと云ふと、其亭主は自分は病氣で物を吐くと云ふこともなければ下痢することもなし熱もないそれを病院に入れられては甚だ困ると言つた、其處で掛りの者がお前の便の中には危險な黴菌が混じて居るから病院に這入らなければならぬと言つたところが、初めて納得した、で病院にどうして行くかと云ふと、私は歩いて行くと言ふ、歩いて行つては甚だ危險であるからと云ふので擔架に載せて送つたと云ふ一つの笑ひ話がありますが、さう云ふ風に黴菌を携帶して歩いて居るものがあります、それで其便なり尿なりと云ふものは非常に危險なものであります、さう云ふ風に此黴菌が患者からして大便なり尿なり排泄されて方々へ傳播されて行く虞れもありまして、或は又今頃から發生する蠅が非常に窒扶斯菌

なり赤痢菌なりの媒介者となるものであります、で此蠅は極めて澤山に發生するものであつて、又それをいくら取らうと思つてもなか〳〵取り盡すことが出來ないものであります、それが又好んで馬の糞であるとか或は人の便或は芥溜と云ふやうな所に澤山集り易いもので、又湧き易いものであります、あなた方も御承知のやうに日本の便所などは極めて開放主義であつて、蠅が便に集つて其便をくつ著けた足で直ぐ飛んで來て吾々の御膳の上に止まる、立派な御馳走の上に止まると云ふ風で、極めて不作法なことをするものであります、例へば窒扶斯菌或は赤痢菌と云ふ風な恐ろしい黴菌を自分の體なり或は足なりにくつ著けて來て、さうしてそこら中を飛び廻り臺所などにも來て御刺身の上などに黴菌をくつ著ける、さう云ふやうな具合にして黴菌を吾々の口に送り込まれることが多いのであります、さう云ふ風に蠅は自分の體なり或は足なりに黴菌をくつ著けて飛んで來るばかりでなく體の中で長い間それ等の黴菌が生きて居るものであります、例へば虎列刺の黴菌でありますと蠅の體の中に二三日間位生きて居ることが出來る、或は窒扶斯菌であれば二日乃至六日間位は生きて居ることが出來る、さう云ふ風に自分の體の中に赤痢菌なり虎列刺菌なりを有つて居つて、其上尚便をあちらこちら撒き散らして居るのでありますから、最も恐ろしいものであります、それから是は夏の衞生には關係しないことでありますが、序に御話致しますが蠅は結核患者の喀痰を喜ぶ、人が非常に恐れるものを好んで結核患者の喀痰などに集る、從つて結核菌などが蠅の體の中に這入つて三日長きは二週間位生きて居ることがあります、さう云ふ風な譯で吾々の臺所は蠅などのために非常に汚されて居る、或は又野菜物でありますと充分洗ふことが出來ないので、百姓の家から八百屋を通して吾々の臺所に這入つて來るまでに、窒扶斯菌なり赤痢菌なりと云ふものが不知不識の間に著いて、さうして臺所に送り込まれることがあります、或は牛乳など

でも多くは殺菌して居りますけれども、それでも尚其中に窒扶斯菌が混じて來る虞れがある、さう云ふ具合に恐ろしいところの傳染病、即ち虎列剌であるとか、窒扶斯であるとか赤痢であるとかと云ふやうなものの菌が吾々の口の中に送り込まれるのであります。

それから又單純に食物ばかりでなく、吾々の手を能く消毒することを怠るために、例へば窒扶斯患者に接して直接吾々の身體の中に送り込んで來る場合があります、でそれ等は窒扶斯とか赤痢とか虎列剌とかと云ふ極めて主だつた傳染病に就て簡單に御話したのでありますが、其外夏になると極めて腸或は胃を損ねる病氣が多いのであります、恰度今頃からして往來を歩いて見ますと、八百屋なり果物屋なりの店には旨さうに紅い覆盆子が竝んで居る、或は夏蜜柑、或ひは「バナナ」と云ふやうな果物が澤山ある此果物が甚だ吾々の爲に腸胃を損なひ易いもので、それでなくても夏になりますと凡て腸胃の働きが非常に鈍くなり或は消化力が弱くなつて居るところへ不消化の果物などを喰べる、それがために屢々腸加答兒を起して來る、若し腸加答兒などを起してくるとそれに乘じて外の黴菌が吾々の身體に發生し易くなると云ふ虞れがあります、殊に是から暑くなりますと好んで氷を飲むと云ふことは、是は餘程注意をしなければならぬのであります、盛夏の候になりますと、何處の氷屋の店でも滿員である、ちよつと散歩しても氷を飲むと云ふ風で、此氷を飲むと云ふことは非常に腸胃を惡くし易いのであります、近來は單純な氷ばかりを飲むと云ふことでなしに、氷の中へいろ／＼のものを入れて貰つて居る、私共の經驗に依りますと、夏暑氣が盛つて來ると大腸加答兒或は赤痢と云ふやうな病氣を起し易いところの氷の中へ小豆を入れて貰つて居ります、所謂氷小豆であります、さう云ふものを喰べて大腸加答兒或は赤痢に罹つたものも多いのであります、それで私は強ひて氷を飲むのが惡いと申上げるのではありませぬ、一體

吾々が非常に働いた後には汗をかく、汗をかくと云ふことは吾々の身體に水分が少くなつたと云ふことを意味するので、さう云ふ時に水分を供給するのは是は自然の法則でありますから、其時に水を飲むと云ふことは惡い譯ではないのでありますが、自ら分量を制限しなければならぬ、冰などを飲むとそれが一の習慣となつてしまつて、今日飲むと明日も飲まなければ居られぬ、明後日も飲まなければ居られぬと云ふ風に、習慣になり易いものでありますから、是等は餘程氣を付けなければならぬことと思ひます其他「サイダー」であるとか或は「シトロン」或は平野水と云ふものは、夏季に於て吾々に供給せられる飲料でありますが、それらも注意しなければなりませぬ、で少しでも其中が濁つたやうなものは必ず黴菌が湧いて居る、「サイダー」などでも其中が少しでも濁つて居れば黴菌が居るもので、それが腸に行くと下痢を起す、斯う云ふ點は餘程御注意をなさらなければなりませぬ、果物も生で喰べるよりも寧ろそれを煮た方が宜いのであります、煮ると果物の中の糖分が出る、それに尚砂糖でも加へて煮ると其砂糖が多ければ多い程黴菌を殺菌する力が殖えて來るのであります、即ち黴菌を殺菌すると云ふ意味に於て煮て喰べる方が宜いのであります。

それから其外の食物でも夏季に上がるところのものは、成るべく果物と同樣に煮たものを上がる、或は魚などでも殊に刺身などは夏は甚だ危險であります、日本では好んで此刺身を喰べるのでありますけれども、刺身が吾々の口に這入るまでには魚屋でどの位冰を以て冷されて居るかと云ふことを考へますと、甚だ恐るべきものであります、冰に漬けて居つた魚が俄に冰から離れると、直ぐに腐敗し易くなつてくる、さう云ふ刺身には黴菌の發生が非常に旺んなものでありますから、是れを喰べると腸加答兒などを起し易いのであります、それ故に夏上がるところの魚などは能く煮るとか能く焼いたものを喰べると云ふことが、最も肝要なことであります、それ

から若し水を飲むにしても、近來は井戸が多く潰されてしまつてさうして各戸殆ど水道でなければならぬと云ふやうになつて居りますが、無論是は水道のある市中のことを御話するのでありますが、まだ郡部などに行きますと水道の設備が完全して居らないのであります、それで水道の完全して居るところは比較的赤痢なり窒扶斯の流行が少なくなつたのでありますけれども、堀井戸の水でも尚之を一遍煮沸して用ゐると云ふことが最も必要であります、例へば井戸の周圍などからして下水の水が流れ込む、それには窒扶斯菌なり赤痢菌なり或は其外の菌が井戸の中に流れ込む、それ等の黴菌は井戸の中で薄められて傳染力が弱めらるゝのでありますけれども、それでも尚人體に這入ると害を起してくるものでありますから、是も煮沸して御飲がりなさることが極めて必要であります。

それから小兒になりますと腸を損ふと云ふことが非常に多くなつてくる、例へば哺乳兒あたりでありますと、授乳期の關係から非常に腸加答兒を起し易くなつてくる、四歲或は五歲位の子供になりますと僅かばかりの腐敗物のために、劇しい腸加答兒などを起すことが多いのであります、ところがさう云ふ風な子供になりますと、抵抗力が非常に弱いために僅かばかりの下痢をしても甚しく身體に影響する、例へば同じ赤痢のやうなものであつても、是が小兒に來る場合には直ちに心臟を侵して來るとか或は腦膜炎を起して來るとか云ふ虞れがあります、殊に恐るべき疫痢と云ふ病氣は心臟が惡くなつて來る病氣でありまして、今まで丈夫であつたものが急に三十九度とか四十度と云ふ熱が出て來て、間もなく下痢を起し或は全身に痙攣を起して來るので、僅か一晝夜經たない中に心臟麻痺を起して死んでしまうと云ふやうな怖ろしい病氣がありますから、殊にあなた方の御家庭では子供に向つては餘程攝生と云ふことには御注意を願はなければなりませぬ、で小兒が腸加答兒を起し易いのは多く果物から起るのが多いの

であります、例へば玉蜀黍であるとか或は西瓜であるとか、殊に恐るべきものは甜瓜であります、此甜瓜から腸加答兒或は赤痢を起すことが非常に多いのであります、是は特に御注意を拂ひませぬと大失策を起すことがあります、でそれ等は主に口から這入るところの食物に就て、吾々が夏に於て防がなければならぬ事柄を御話したのであります、それで言葉を換へて云ひますれば口の養生を充分にすると云ふことが必要であつてそれと同時に一面に於きましては梅雨の候になりましてから、夜など寢冷えすると云ふことが腸加答兒を起す原因になり易いのであります、夜寢る時には非常に暑苦しいので蒲團などは殆ど掛けずに寢てしまう、それでなくても夜中になると隨分蒲團などを跳ね飛して　あなた方は極めて御行儀が宜いからさう云ふことはありますまいが、子供などになると夜中に蚊帳の中から轉び出してしまつて、何處へ行つてしまつたか分らないと云ふ位蒲團の中で活動すると云ふ風で、特に夜明け頃になると俄に氣候が冷えて來て其時に思はず寢冷えをするのであります、寢冷えすることは啻に風邪を引くばかりでなく、其前日あたりに果物を餘計喰べるとか或は不消化のものを喰べる、それに加へて寢冷えすると、是が動機となつて腸加答兒などを起すことがあるのであります、それを防ぐ方法としてはいろ／＼な工風がありますが、例へば大人であれば腹卷をして寢るのが最も宜い方法であります、それから子供であるならば近來行はれて居りますところの「寢冷え不知」と云ふやうなものを以て、何處へ轉び出ても寒さを引き受けぬやうな方法を講じてやることが最も必要であります、段々世の中が進步するに隨つていろ／＼な發明が行はれ、從つて身體が弱くなるやうに思ふ、例へば夏などは煽風器を用ゐてつい電氣を消すのを忘れて夜通し煽風器を掛けて居ると云ふことは、吾々が往々耳にすることでありますが、さう云ふ風なことから人工的に寢冷してしまうと云ふことがあります、それ等は今御話しました

食物の養生などに加へて夏の間吾々の身體を保護すべき一の方法であらうと思ふのであります、以上申上げましたのは吾々が霖雨即ち梅雨の候から夏の暑い盛りにかけて、如何にして吾々の身體を保護して行くか、如何にして吾々の食物に注意しなければならぬかと云ふことを簡單に御話したのであります。

第二には唯さう云ふ風にびく〳〵怖れて居るばかりでなしに、進んで吾々の身體を丈夫にする、例へば今まで丈夫であつたものを尙一層強壯にすると云ふことが、第二に必要な夏の衛生の條項であらうと思ふのであります、近來は此避暑即ち轉地して暑を避けると云ふことが、一つの流行とも申しませうか、非常に流行る、で何處か夏になつて涼しい所へども行かなければ、何となしに肩身が狹いやうな氣がする、それがために暑中休暇の前になると友達同志集つて、あなた方の間に行はれる問題は、此夏は何處でどう暮すか、或は輕井澤或は鎌倉に行くと云ふ風に、一ケ月なり二ケ月なりを暮さなければ何となく肩身が狹いと云ふやうな惡い流行が見えるやうであります、けれども悉く惡いと云ふのでなくて、若し時も許し金も許し總ての條件が備はり居るならば、或は鎌倉に或は輕井澤に或は箱根と云ふ風に山間又は海濱に暑を避けると云ふことは決して惡いことではありませぬ、けれどもさう云ふ風に山間なり海濱なりに行くと云ふのは、唯單に行くと云ふだけでは殆ど意味がないのでありまして其行くのには自から健康狀態を研究して、さうして海濱を擇ぶとか或は山間を擇ぶことを第一に考へなければならぬのであります、例へば腸の弱い人は是は却つて海水浴をしたために腸加答兒に罹り易いと云ふやうな虞れがありますし、或は又心臓が惡いと云ふ人であれば海水浴などをして思はざる災難に罹ることがあります、或は腎臓炎に罹つて居つた人が海水浴などをすると再び腎臓炎を起す憂がありますから、それ等は餘程注意して海濱に行く前に必ず醫者に健康診斷をして貰つて、さうして海岸なり山間なりを擇ぶと云ふこ

とが必要であります、或は又神經衰弱の人心臟病の人腎臟炎の人は寧ろ山を擇んで其處へ轉地する方が適當であります、それでは海水浴は初めはどう云ふ風にすれば宜いかと云ふことが次いで起るべき問題であります、吾々が田舍の溫泉場に行くと恰度水族館の膃肭臍のやうに、這入つたり出たり復這入つたり出たりと云ふ風に、一日に十五回も二十回も出たり這入つたりするのを見受けます、それと同じやうに矢張り海岸に行つても朝から晩まで飛び込んで居るものが澤山ある、それ等は誤つた仕方でありまして、多少水泳などを習つて居る人ならば格別でありますが、さうでない普通の人が水浴をする場合には、初めの中は十五分乃至二十分位海水に漬つて居ると云ふことが必要である、それから海の水が餘り波の荒いのもいけないし、全く波のないのもいけないのであります、此近傍を擇ぶならば逗子であるとか鎌倉であるとかと云ふやうな、餘り波の高からず又波の餘り穩やかでない所を擇ぶのが必要であります、

さうして只今申上げました通り午前中は稍々暑くなつた時分に十五分乃至二十分位游る、それから午後は日の少し下がりかけて來た時分に這入るやうにすることが必要であります、で海中に這入る時は必ず耳それから又目を保護しなければならぬ、海水浴後に中耳炎を起したり目を患ふことがあると云ふことは、耳鼻咽喉科若しくは眼科の醫者が言ふのでありまして、例へば海水浴が終つて秋九月頃學期が始まる頃に中耳炎に罹り或は目を惡くすると云ふ例が多くあるのであります、それでありますから海水浴が終つたならば、必ず全身をすつかり拭つて潮氣を取つてしまう、それと同時に耳の中目の中を掃除することが必要であります、海水が耳の中に這入るのを防ぐために耳の中に何か詰めると云ふことは害があります、普通ならば唾なりで耳の中を潤して海中に這入るならば、中耳炎に罹る憂はないのでありますから、それ等の注意を怠らぬやうにして這入ると云ふことが必要であります。

それから山に行くと云ふ方も、是も餘り高山で空氣の稀薄なところを擇ぶと云ふことよりは、寧ろ輕井澤であると云ふやうな所を擇ぶことが必要であります、無論山に行つても涼しい山間で運動もせず蟄居して居ると云ふことは、却つて害があることで、山間に行つたならば寧ろ大いに運動することが必要であります、唯それも前に申上げました心臟病の人であるか結核の人であれば、さう云ふ方は餘り過激な運動も宜しくありませぬけれども、さうでない人は努めて運動をすることが必要であります、それでは山にも行かず海にも行かないで、東京あたりの暑い所で暮す方は如何にして此夏を過さなければならぬかと云ふ問題が起る、一體吾々の身體は自然の法則に任せて、寒い時には「ストーブ」のあたりに蟄居して居つて、さうして殆ど籠城主義に閉ぢ籠つて居ると、外に出れば直ぐ風邪を引く、それと同じく夏でも暑いからと云つて部屋の中に引つ込んでぶら／＼夏を暮すと云ふことは却つて身體に害があるのであります、それでありますから寒い時には寒い風に當つて身體を鍛へることが必要であると同様に、夏は成るべく暑い思ひをすると云ふことが必要であります、で夏汗をかくと云ふことは是は自然の法則に從ふのであります、盛んに働いて盛んに汗をかく、さうして早く身體を丈夫にすると云ふことが最も必要な健康法だらうと思ふのであります、で暑中休暇と云ふものは唯暑いから休むと云ふ簡單な意味ではなからうと思ふのであります、即ち此夏の間に充分身體を鍛へ上げ、さうして來るべき秋、冬に向ひ合ふところの立派な身體を拵へ上げると云ふために與へられたる休暇である、さう云ふ意味から私共が考へでは、此夏海岸に行くとか山に行くとかと云ふことをなさらぬ方は、御家でもつて平常よりも寧ろ御働きになると云ふことが、最も好い健康方法であらうと思ふのであります、例ばあなた方のなさる、仕方は澤山あります、書物を讀むばかりでなくいろいろ夏の仕事があります、或は洗濯も自らなさる、或

は夜具蒲團を干し或は夜具蒲團の張り替へをすると云ふ風に、御家の手傳をする、さう云ふ仕事のために一日位は不知不識の裡に暮すことが出來ます、即ち充分働いて充分汗をかくと云ふことが、極めて必要な夏季の健康方法であらうと思ふのであります。殊に先程申上げました通り、太陽の光線と云ふものは實に吾々に最も安價な消毒力を與へてくれるものであつて、結核菌でも其他の窒扶斯菌でも赤痢菌でも或は虎列剌菌、それ等の黴菌を日光に曝すならば僅かの時間の間に死んでしまうと云ふことを利用して、夏土用干をする、土用干をするにも餘程氣を付けなければならぬものであります、例へば非常に暑い時にいろ〳〵の物を干して、九月の初め頃になつて恰度二百十日或は二百二十日と云ふ時分に雨が多いと、折角干したものも黴び易い、それでありますから夏干すと云ふことは寧ろ消毒の意味を以てすることが必要であります、さうして秋になつてそれ等の仕上げをすることが第二に必要なことであります、で今申上げましたのは、吾々が此夏季を利用して充分に働いて從來健康であつたものを益々健康にすると云ふ一の方法であります、積極的の夏季の衞生とでも申しますか、さう云ふ風に夏を利用すると云ふことが必要であらうと思ふのであります。

之を要しまするに、夏の衞生と云ふことは第一が口の衞生、是は最も必要であります、それで外界からいろ〳〵な病毒が身體の中へ這入るのを防ぐと云ふことが一番必要なことであります、それと次ぎに第二には夏の間の休暇を利用してさうして吾々の身體を一層健康にして、秋、冬の時候に抵抗するところの身體を鍛へ上げると云ふことが必要なことであります、尚詳しく申上げますと餘り長くなりますから、極く簡單に夏の衞生と云ふことを申上げた次第であります。

夏の衣食住

莊司秋次郎

夏は「薄い輕いものを著、淡泊した新鮮なものを食ひ、風通しの良い、涼しい處に居る」と云ふのは生理自然の要求に出る衛生法であつて、野蠻人と雖、夏は自から斯ういふ生活法の方針を採るに違ひがない、周圍の自然も亦自から之に適するやうに、緑の蔭多く、瑞々しき野菜、果實等が豐かになる。それで自然に適應した生活さへすれば、身體も精神も爽快に健康に保ち得る筈であるが、さてその自然に適應すると云ふことについて野蠻人と文明人との間には大なる相異がある。吾々は野蠻人の如き頑強なる身體を有し、全く自然に順應する生活をなすべきものと假定し、それを衛生の土臺と看做して、これを今日の知識に由て、今日の社會的生活に最も適當した最良の衛生的生活に燒直し或は細工する事が必要である。

一、衣服に就て

野蠻人は暑さに對しては如何にその皮膚を保護するであらうか。先づ裸體のまゝで樹蔭に隠れるであらう。これならば涼しいには相違ない。木蔭は住居の方に譲つて、此處には暑熱に對する衣服の關係を考へる積であるが、吾々は暑氣を感ずると、家の内に於ては、あゝ暑いと云ひながら衣服を脱ぐ、「シャツ」や肌著を脱ぐといふやうに、原始時代の衛生法に立歸るのである。衣服は元來昆蟲に螫されるとか、荊棘に皮膚を傷けるといふやうな事を防ぐ爲に、旁々装飾として簡單な衣服が出來、更に禮儀又は贅澤を競ふの具となつたのであるから、贅澤や滑稽を演ずるの虚榮心よりも熱さが強ければ自から正直になつて、昔の裸體が戀しくなる。人に咎められたり、笑

はれたりさへしなければ勿論衣服などは脫棄てる。併しながら全裸體は果して最も衛生的であるか何うか、又果して最も涼しいか何うか、茲が考へ所である。

全裸體は最も衛生的なるか

この問題に就ては私は一應、全裸體を以て最も衛生的であると答へるに躊躇しない。何故ならば、吾人の皮膚はその組織、その部位、その彈力等より見て外來の自然の刺戟侵襲に對して立派な防禦物である。その證據には皮膚が健全なる限りは「ペスト」破傷風も體內に侵入することは出來ない。然るに僅かに貝殼で足の皮を傷めたとか、薄の葉で手の皮を切つたとか云ふやうな殆ど肉眼では見えぬほどの小さな皮膚の損傷があつても、其處から種々の恐るべき病原菌が侵入し得るのである。之を以て見ても、皮膚は如何に立派なる活きた衣であるかゞ分かるであらうと思ふが、從つて又之を大切に保護しなければならぬことも自から明かである。斯樣に立派な活きた天與の衣であれば、別にこれを覆ひ隱す必要は更にない。尙ほ又皮膚も植物の葉の如く適當の日光と空氣とに觸れる必要がある。皮膚に炎症を起して疼痛を覺ゆるほどの日焦を起したり、急に涼しい風に當つて寒冒をひいたりしては宜しくないが、僅かの事で斯樣な害を受けるといふのが、そも〱既に病的である。普通吾々の白い、と云はんよりは寧ろ蒼白、軟弱い皮膚は、日陰の植物又は溫室で育てた植物と同樣、全く健康な自然の皮膚狀態とは云ひ難いのである。此點からも裸體を以て衛生的と看做さなければならぬ。その他衣服の弊害から逆に觀察して裸體の效能を數ふればなか〱多いが、前にも述べた通り、皮膚を健全に保つことが極めて必要なことを思へば、矢張適當な衣服を以て外來の危害を豫防する方が得策である。さうして見ると、野蠻人の裸體生活は自然に適した方法ではあるが、利口な方法でない。併し今日の文明人の服裝は、衛生上から見て却て無益、有害の點が少なくない。故に吾人も裸

を本體として、或は寒暑の爲め、或はその他の刺戟又は榮養の經濟上の爲め、或は禮儀の爲め乃至化粧等の爲めに、止むを得ず又は損をせぬ限りに於て衣服を應用したいと思ふのである。

次に防寒の方の目的に就ては玆に論ぜぬが、暑熱に對して衣服は如何なる關係を有して居るかと云ふにこれも先づ

裸體は最も涼しきか

と云ふ問題を揭げて論ずるのが捷徑である。野蠻人が最初暑熱に對して如何なる手段をとつたかと考へるに、先づ木陰に隱れ、或は蕗の葉又は蓮の葉のやうなものを被つて直射日光を避けたことであらうと思はれる。直射日光に對しては裸體ではたまらない、衣服を來た方が熱くない、又地上より反射し來る熱に對しても裸體よりも衣服を纏ふた方が熱くないと云ふことは明かである。併し直射日光又は直接の反射熱でなく、空氣中に瀰散した熱、或は熱氣に對しては如何であらうか。通常家の内に於て夏の日中にあゝ熱いと云ふて羽織を脫ぎ、單衣を脫ぎ、「シャツ」や襦袢までも脫棄てる時には、確かに全裸體になれば一番涼しいと考へるのである。然し果してその然るや否やを調査して見る必要がある。この場合に於て熱いのは、外部から熱を受ける爲といはんよりは主として體溫發散が妨げられる爲である。故に著物を脫ぐのは正當であるが、それは「シャツ」や肌著のやうなものが皮膚に密著して、殊に汗で潤ふて居る上に著物を著た場合である。卽ち體溫は汗で潤ふた「シャツ」類に吸收されるが、それの放散が妨げられる、汗の蒸氣で蒸されるやうな狀況になる。斯の如き場合には無論熱苦しいのみならず確かに有害であるから、早速脫いで、身體を拭き淸めた上に新しい著物に換へなければならぬが、若し淸潔な乾燥した著物を皮膚に密著しないやうに纏ふならば、裸體よりも涼しい道理である。卽ち一方に於ては外から受ける熱を遮り、又一方に於ては皮膚と衣服との間に、外部と異つた氣溫の層が出來るから、微々たりと雖

そこには常に風の流れが起る。暑中に素肌の上に褞袍のやうなものを纏ふと案外に涼しいのは此の理由によるのである。

故に右の結論としては、不潔な又は汗に濕つた襦袢や單衣を著てゐるよりは、裸體でゐた方が衛生的で且つ涼しい、併しながら清潔なさば〱した著物を寛く皮膚に密著しないやうに著るならば、裸體よりも此の方が衛生的で且つ涼しいと云ふことになる。

更に裸體で居るときと著物を著て居る場合との利害得失を論ずれば、裸體で居れば全般に皮膚を強固にする效がある。又食慾も進む、呼吸も極めて順當に自由に行はれ、全身の爲に頗る佳良の影響がある。これは事實である、出來得るならば注意して二三日試みれば明かに分かる、又皮膚を直ちに拭いたり、洗つたりするのに少しも億劫でない。然かし裸體では、これ以上脱ぐわけには行かず、肌に衣服を著けることは非常に不快に感ずるやうになる。蚊に刺され、蠅などに止まられるのは甚だうるさい、又た危險なことである。うつかりすると風を引く、殊に裸體のまゝで午睡などをすれば寒冒に罹り易い。夕立の來る時もさうである。然しこれは稍々習慣がついてからならば殆ど恐るゝに足らぬ程皮膚が強固になり、機能も完全になるもので、通常いたく恐れられ特に小兒に於ては夏季第一の衛生法の如く警戒される所の所謂寢冷えと云ふ如き事も、裸體に慣れば決して害を被らなくなる。最初は腹部の皮膚が冷えれば反射的に腸を刺戟して、腹が鳴り、多少下痢と迄は行かなくとも便意を催すものである。小兒などは實際下痢を起す。然し注意してこれに慣れば、二三日の後には全く腹部を出して窓を開け放つて、夜風に當つて眠るも寢冷や下痢などを起さなくなる。尤もこれは何人にも奨勵すべき方法ではないが、少しく習慣をつければ、此位までも強固になると云ふ實驗談である。其他種々の點から、私は若し出來得るものならば、少なくとも夏季室内に於ては可及的裸體生活を奨勵して憚らない、殊に小兒は薄い腹卷だ

けをさせて成るべく裸體にして置たいと思ふ。但し此の場合には前にも云ふ通り皮膚を昆蟲に螫され易い、又何時とはなしに微些い擦過傷などを作り易い、殊に小兒は容易に皮膚が不潔になるから、蟲に螫されぬやうに、傷をせぬやうに、又屢〻全身を拭くことが必要である。

清楚した浴衣又は帷子のやうなものを著て、行儀よく、きちんとして居れば勿論涼しい。蟲などに螫されることも防げる。風を引くやうなことも餘りない。これは自覺的に、衛生的に、將た社會的に發達して來た所の普通に最も適當な方法に相違ない。只今日の婦人の帶だけは夏季には如何に夏向の帶と云ふても氣の毒なやうなものである。これも風俗とすれば急に廢するわけにも行くまいが、單に夏季に於て不都合だと云ふ理由だけでなしに、何とかもう少し改良されても宜さそうな品物である。この點から云へば、髮の結ひ方も、少なくとも夏だけは日本髷よりも西洋髷の方が便利なやうに思はれる。最後に、夏だけは日本服、殊に浴衣と云ふものは實に適當な著物で、これは西洋人も羨やむ所である。汗になり次第幾度でも簡單に洗濯が出來る。只これにも厭な惡習慣があつて、折角洗濯をして清潔にしたものを、わざ〳〵飯糊、しかも腐つたもので再び不潔にし直し、それをかち〳〵に乾燥して著る人がある。これはつまり一つは前に述べた通り、糊のきいて居る著たての時だけは、暫時皮膚に密著しないから涼しいのと、尚ほ次に洗濯する時に垢が落ち易いと云ふ理由から起つた發明であらうと思ふが、この微菌の乾燥標本の如き硬ばつた著物は、少しく發汗すれば三十分間と持たない、忽ち柔かになつて、斯樣なものを附けない時よりも皮膚に密著する。最初乾殺した微菌は蘇生しないとしても、濕潤した糊附の著物は極めて都合の好い微菌の培養地であることを忘れてはならぬ。

（以下次號）

胃潰瘍の話

醫學士　篠原昌治

胃の疾病は隨分多くあるものでありまして、それが爲に苦しんで居らるゝ人は決して少數ではありません、而して胃病にも種々なるものがありますけれど其内で最も危險なるものは胃潰瘍と胃癌であります。夫故私は今其胃潰瘍に就て申上げたいと思ひます。

胃潰瘍は如何にして發生するものであるかと云ふことに就ては種々なる說明が試みられて居りますけれど、まだ充分に解つて居りません。胃潰瘍の發生は年齡に大なる關係を有するものでありまして、十八歲より三十歲位迄のものが此病氣に罹ることが最も多くあります、然し胃潰瘍の爲に胃の幽門狹窄症と申しまして胃が腸に移り行く部分が狹くなりまして其爲に胃の內容物が腸の方に通過することが困難になることがあります。之れは少し年齡の多き人卽ち三十歲より四十五歲迄のものに多くありますけれどこれとても病氣は多く夫れよりも以前に發生したものでありまして、其結果として幽門が狹くなつたのであります。小兒と老人には胃潰瘍は稀であります。男と女とでは女の方が多く罹ると云ふ人もありますけれど、これはさしたる差別はないことゝ存じます。

胃潰瘍の時には如何なる症狀が生ずるものかと申ますに、これは各々場合によつて非常な相違があります。その輕きものに於きましては、生前少しの症狀もなくして、死後解剖して見て始めて胃潰瘍に罹つて居つたと云ふことが解るものもありますし、又他の場合では、少しも胃潰瘍があると云ふ模樣がなくして急に危險なる症狀、例へば胃出血とか又は穿孔性腹膜炎と云ふ樣なことが生ずることもあります。或時にはそれは胃潰瘍に特有のものではありませんけれど、一定の症狀を呈しまして其爲に胃潰瘍ではないかと云ふことを想像せしむることもあります、卽ち長き間持續して胃が壓迫せらるゝ樣な感覺、輕

度の疼痛、噯氣、又時々嘔吐が來ると云ふ樣なことがあるのであります。其次には一程度迄は本病に特有なる症狀が現はるゝことがあります。それは發作性に來る烈しき胃部の疼痛、嘔吐、吐血、胃液の中の酸が多くなること等でありまして、此等は胃潰瘍の診斷に最も大切なことであります。

胃痛は胃潰瘍の時には最も屢々來るものでありまして、これは種々の時に發しますけれど、最も多きは運動した後とか又は食後、殊に澤山に粗食を攝取した後に多く來るものであります。時としては食後一定時間、例へば三十分とか又は一時間に規則正しく來ることもあります。胃潰瘍の時の疼痛は、多くは胃部が全體に痛い樣な、壓しつけらるゝ樣な、何とも形容の出來兼ねる一種の不快の感覺があるものであります。併し斯る疼痛は他の胃の病氣の時にも來るものでありまして、餘り特有のものではありません。潰瘍に固有なるものは發作性に來る烈しき疼痛でありまして、恰も切るが如く、裂くが如く、穿つが如きとでも申しませうか、一種特別の堪へ難き痛みであります。

胃痛は多く胃の部分に發するものでありますけれど時として臍部、脊柱の兩側、胸部より遂には腕に迄も及ぶことがあります。胃痛があれば多くの場合に於きましては胸苦しく感ずるものであります。又此痛みは身體の位置を代ふることによつて影響することがありまして、右側を下にすれば疼痛を生じ、左側を下にすれば治癒ることがあります。それは多分潰瘍の出來た位置に關係するものであります。疼痛のある時間は數分より數時間の長きに涉ることもあります。

其他常に一局部にのみ限局せる疼痛が來ることがあります。此疼痛も食後に來ることが多くありまして胃が安靜になれば止むものであります。其位置は心窩部か又は臍部に來ることが多くありますけれど、時としては背部に近く來ることもあります。斯く明かに限局せる疼痛は常に潰瘍であると云ふ樣に考へ

て居る人もあります。胃潰瘍の際には斯様な疼痛が來るものでありますけれど、それ等は一つ々々が判然と現はれると云ふ事は極めて稀でありまして、多くはその何れともつかぬ様なものか、又は種々合併した様な痛が來るものであります。然し其疼痛が常に同じ場處にあること及びその疼痛が食事と關係があると云ふ様なことが胃潰瘍に特有のものであります。一般に絶對に安靜にして居れば疼痛は輕くなりますし、胃部を壓迫すれば強くなるものであります。

嘔吐も胃潰瘍の時には最屢々來る症狀であります。併し時としては全く嘔吐のないことも亦唯稀にのみ來ると云ふこともないではありません。嘔吐は食後胃の疼痛と共に來ることが多くありまして、殊に不消化の食物を攝取した時に多く來るものであります。其時は吐物の中に食物の殘片が交つて居ります。又胃潰瘍の爲に胃の幽門狹窄症を發しますれば、嘔吐する場合が多くなります。

血液を嘔吐くと云ふことは胃潰瘍の診斷上最も大切なことであります。其血液の分量は多いこともあり又少いこともありまして、それが其他の胃の內容物に混じて吐くこともあり、又單に血液のみを吐くと云ふこともあります。此吐血と云ふことは胃潰瘍に於て大なる意味を有することでありまして、若し血を吐けば潰瘍と云ふことが解るけれど、然らざれば潰瘍の診斷は頗る不明であると云はるゝ程のものであります。

胃潰瘍の患者に於きましては、血液を吐く樣になつて始めて醫者にかゝるものも少くありません、夫れ迄は身體に何等の異狀を感ぜぬものもありますし、又多少胃がわるくとも格別心配する程のこともないと云ふて其儘にして置くこともあります。此等の人が仕事をして居る時か、又は夜中などに急に喪神せるが如き狀態となり、眩暈を來し、眼先が暗くなり、惡心を催し遂に嘔吐を來すものもありまして、其吐物は血液の中に食物を混じて居ることもありますし

又は純粋の血のみを吐くこともあります。其血液は一部は凝結して暗黑色となつて居ることもあり、又長く胃中にあつたものなれば咖啡の樣な色になつて居ることもあります。其分量は極めて少ないこともあり、又一時に五合以上も吐出することもあります。併し胃潰瘍の時の吐血は常に此樣なものではなく、胃がわるくてその治療をして居る中に、急に吐血する樣なことも屢〻見ることであります。

胃潰瘍の時に胃の中に出た血液は口から吐き出すばかりでなく、一部分は腸を通過して肛門より出づることがあります、其時は大便が黑い色をして、飴の樣にねば〳〵して居ります。又口の方からは少しも出ないで、全部が腸の方に行くことがあります。其時は胃に出血があつたか、なきかと云ふことはよく分りません。唯急に喪神狀態となり、皮膚が蒼白色となる樣なことがありまして、其後に黑色の便が出ることによつて知らるゝものであります。

吐血の結果は如何になるかと申しますに、其は主として出血量に關係するものでありまして、時として出血の爲に直ちに死亡することもないではありませんけれど、それは極めて稀であります。其他吐血が每日續いて、どうしても止めることが出來ず、其爲に死亡するに至ることがあります。一般に吐血すれば高度の貧血を來し、全身疲勞し、腦貧血の爲に眩暈、耳鳴、眼前閃光、嘔氣、時としては頭痛等を來すことがあります

胃出血の後は病症大に輕快することがあります。それは非常に注意して養生する爲かとも思はれます。又出血後一二週間の後に大によくなつて、其れより本統に治癒る樣なこともありますけれど、普通は又更に胃潰瘍の症狀を發するものであります。

胃潰瘍の時には胃液の分泌量が多くなり。且つ胃液の中の酸の量が多くなります。これは胃潰瘍に特有のものでありまして、醫師が此病氣の診斷をつけるには極めて大切のものでありますけれど、餘りに御話しが專門的になりますから省略することゝ致しま

す。胃潰瘍の時には食慾は變りはないものでありますけれど、喰べれば痛むからと云ふて食事をせぬ人もあります。身體の榮養狀態は變化のないことが多くありますけれど、食事を取らなかつたり、又は度度嘔吐すれば段々衰弱するものであります。

胃潰瘍の時に最も危險なるものは胃の穿孔することであります。卽ち潰瘍の爲に薄くなつた胃壁に孔を生じ、其爲に胃の內容が外に漏るゝことであります。それが腹腔內に破るゝことと肋膜腔及び肺の方に行くことゝ二通りあります。

若し胃壁に孔を生じて、內容が腹腔內に入れば穿孔性腹膜炎を生じます。元來胃の中には種々の黴菌などが居りますから、それが腹腔に入ればその爲に腹膜炎を生ずるものでありまして、其際は烈しき腹痛、腹部の膨滿、嘔吐を發し、虛脫に陷り死亡するものであります。穿孔性腹膜炎を發すれば殆んど凡てが死亡すると云ふてもよい程危險なものであります。此れは全く健康なるが如き人に急に來ることもありますけれど、多くは胃潰瘍の經過中に發生するものであります。又胃が肋膜腔の方に破れますれば化膿性の惡臭を放つ左側肋膜炎となり、それが肺に至れば肺壞疽となるものであります。併し時として胃潰瘍が穿孔しましても、それが全腹腔內に擴がらずして、唯一局部だけに止まり、限局性腹膜炎となりて治癒することもあります。

胃潰瘍の時には前申上げました通り幽門狹窄症と申しまして、胃より腸に移り行く通路が狹くなることがあります。然しこれは多少狹くなりましても、大なる支障なしに通過する內は餘り差支のないものでありますけれど、ひどく狹くなりますれば食物が腸の方に行くことが出來ず、其爲に胃の中に停滯する樣になります。併し其際には普通二三日に一回づゝ澤山の嘔吐になりまして、此停滯したものを吐出することによつて之を補ふて行くものであります。併し其內にだん／＼胃が大きくなりまして、胃の運動する有樣を腹壁の上から見ることが出來たり、又は胃

部に於て大なる腫瘍を觸るゝ樣になることがあります。斯く食物が胃より腸の方に通過することが出來ぬ狀態が長く續きますれば、患者の榮養がわるくなり、次第に痩せて參りますけれど、それでも時々胃を洗滌し、注意してよき食物を與へますれば數年の生命を持續することも出來ます、又此狹窄より胃癌を生ずることがあります。

胃潰瘍の時には血を吐くものでありますが、それを鼻腔又は肺臟よりの出血と間違へることがあります。それは夜中眠つて居る時などに鼻から出血しまして、それが鼻咽腔に入り、不知不識の間に嚥下しまして、其爲に嘔氣を催し吐出することもあります。その時はよく鼻の方の檢査をする必要があります。

又「ヒステリー」の時にも胃の部分に痛みがあつて、それと同時に血を吐くことがありまして、胃潰瘍と間違ひ易いことがあります。然し此際の出血は齒齦、鼻腔、咽頭等より來るものでありまして、其色鮮明で、稍々稀薄のものであります。

肺から出た血と、胃から吐いたものとの區別は、其患者は以前に肺病の症狀があつたか、又は胃病の徴候があつたか、又咳嗽と共に出たか、又は嘔吐によつて吐出したかと云ふ樣なことを參考するものであります。併し此等の事が同時にあつて頗る疑はしい場合もあります。肺から出た血は眞赤で、泡があつて、餘り塊まらないけれど、胃から出た血液は暗赤色で、食物の殘片を交へ、凝結して居ると云ふ場合が多く、又肺からの出血なれば翌日になつて血液を交ぜた喀痰があり、胃出血なれば黑き大便を出すものであります。

治療上に就て注意すべき事は澤山ありますけれど、餘り長くなりますから、今回は省略致します。

精神と身體の健康（七）

醫學士　渡邊房吉

むかし支那の聖人は、『心こゝにあらざれば、見れど

も見えず、聞けどもきこえず、食へども其味を知らず』と云ひ、此狀態を『放心』と申しましたが、英語でも此う云ふ場合を『心の留守』Absence of mind と申します。

吾々日常の生活でも能くある事でありますが、氣が散つて居つたり、他の事に屈托して居るやうな時、即ち放心若くは心の留守である時には、わからなければならない事が分らなかつたり、感じられねばならぬ事が感じられない事があります。例へば、同じ問を幾度となく尋ねられても一向知らずに居り、或は好い加減の不得要領な返事をなし、高い大きな聲で分り易く云はれて始めてそれと氣の付くやうな事があります。或は當座限りの曖昧な返事をして置いて、後で尋ねられても何と返事をして置いたか一向思ひ出せぬ事があります。

吾々が物を搜がす時にも、他の事を考へながら搜して居れば、現在眼のまへにあつて幾度も之れが眼底にうつりながら、而かもそれが見當らない事があります。彼の有名な大理學者ニュートンでさへ、夢中で學問上の事を研究して居つた時には、懷中時計を鷄卵と思つて齧りかけたと云ふ事であります。見世物の看板に見されて居る時には、懷中の財布を掏られるのも知らぬ人が多いのであります。昔し一人の天文學者が大空の星宿を熱心に見詰めて居つて地上の事に一向氣が付かず河の中へ落ち込んだと云ふ話があります

抑〻五官器は外界の模樣を腦髓へ報知する役目をなすもので、眼が物を見得るは光線が眼の中へ射入するため、耳が音響をきゝ得るは空氣の振動が鼓膜に傳はるため、鼻が臭を感じ得るは臭氣の鼻粘膜を刺戟するため、皮膚が物體を感じ得るは物體が皮膚に觸るゝが爲めであります。これは事實には相違ありませんが、平常健康な時でも、眼に入る物悉く見らるゝもので無く、耳に入る物悉く聞き得らるゝもので無く、寧ろ其大部分は感知されずに失はるゝものであります。況して放心の狀態、心の留守の場合に

は之が感知されないのも至當であります。之と反對に一層注意を傾くる時には、平素感知し得られない事迄微細に感知されるものであります。耳をすまして聞けば遠方の微音もきこへ、眼を拱して見れば遙か彼方の暗影さへ見えるものであります。

故に確に見、確にきゝ、確に觸れんとするには、注視しなければならん、傾聽しなければならん、親しく接觸しなければなりません。勿論強い光や、喧しい騷擾や、激しい疼痛などは特に注意しなくとも感ずるものでありますが、之より弱い刺戟は悉く意識されずに消え失るものであります。

痛いと云ふ感覺などは、精神を他方へ向け、或は他の事など考へて居れば、之を感じない事もあり、或は之を感じても頗る輕度の事があります。概して疼痛のある病氣は日中よりも夜間に於て其痛みの甚だしいもので、日中はそれ程苦情もなくて居るが、夜間になると痛くつて眠られないと云ふ人が多いのであります。之は夜間になれば萬物皆眠りに就て日中のやうな諸刺戟が無く、從て『まぎれて居る』と云ふ事が無いからであります。

或は痛いと云ふ感じは、『痛いわけが無い』と云ふ事が證明されれば直ぐに輕快し、或は全くなほるやうな事があります。疼痛を訴へる患者に蒸餾水を注射してもなほる事があります。齒が痛むがため齒醫者を訪ふ時、途中では痛んでゐたが、玄關へ入れば直ぐになほる事があり。腹痛のため醫者に來て貰つた時、醫者の顏を見れば直ぐなほるやうな事もあります。

頭痛がしてたまらないと云ふ時に、會心の友が遊びに來て、面白く談話して居れば痛みのあるのを忘れて居る事があります。或は實際痛くあつても、なほるものであります。輕い痛みばかりで無く激しい痛みもなほります、想像上のいたみばかりで無い、實際上の痛みもなほります。蓋し疼痛は腦からの一症狀でありますから、精神狀態の如何により或は強く感じられ、或は弱く感じられるのであります。之と

同様にいたく憤慨して居る時には、打たれても敵かれても一向わからず、程經て氣が落ち付いてから始めてわかる事があります。

要するに氣が散つて居れば感覺がにぶくなり、物にまぎれて居れば病氣なども忘れて居るものであります。

（未完）

ニキビの話（上）

賀川哲夫

ニキビは醫學上で痤瘡と名づけ病氣の性質から云へば、多發毛囊炎と唱へられる一種の皮膚病である。これが出來るのは思春期である故に殊に婦人では容貌を醜惡にするので非常に氣にせられて色々と藥を試みても遂に無效であると云ふので屢々吾々皮膚病專門家の門を敲かれるのである。併し此病氣の病理を考へて見ると、恰も美しい蝶が一度はあの醜い毛蟲となつて人々から厭がられねばならぬやうに、人たるものは婦人と云はず男子と云はず一度は必ず此ニキビに苦められねばならぬものだと云ふ事が判る。然らば其原因は何であるかと云ふに、煙の立つ所には火があると云ふ程確實で且つ明白な原因は今日示すことが出來ない、併し今日吾々は此原因を體質の變化と黴菌との二種に解釋して居る。體質の變化と云ふのは、昔から人間の身體は七年の内に一度すつかり新に成ると云ひ傳へた如く、人體の成長し發育するに連れて、身體内の色々の臟器が發育して來て新な官能を營むやうになることでニキビの原因としては大に有力な根據である、年頃になれば聲變りがすると云ふのは、聲帶の厚さが増すためで、明かに發育完成の證據である、今まで產毛であつた所に黑い美しい硬毛が生えるのも發育完成に因る體質變化である、これと同様に男女が年頃になると脂漏質に傾くのである、脂漏質とは皮膚に在る皮脂腺が發育完成して、皮脂を澤山分泌するやうに成ることで、これがニキビの原因として大に注目すべきもの

である。何故年頃になれば脂漏質に成るかと云ふ問題に成ると一寸其説明は容易でない、併し吾々の經驗上から見れば、肥胖病と云つて無闇に肥滿る人、貧血、萎黄病、女子生殖器病（子宮病、卵巣病）月經、飲酒癖、脂膩性食物を好む人などに此脂漏質が起る事が事實であるから、先づ第一に考へられるのは年頃の女子に起る月經と云ふものと**ニキビ**とが何か關係を持つて居るに違ひ無いと云ふ事である。然らば月經と云ふものは何故起るか、これは明に卵巣の發育完成の證據で、思春期に成ると卵巣から或成分が出て來て血液の内に混じり、これが子宮の内面の膜に變化を起させて出血するのである、故に年頃の女子の血液の中には常に卵巣から出る或成分が含まれて居るに相違ない、これが即ち卵巣の内分泌作用と云ふものである、此成分あるがために頭髮はつやつやとして漆のやうに美しく、皮膚は何となく潤味を帶びて羽二重のやうに滑に成るのである、斯の如く卵巣内分泌は一方では女子の身體を美化さすべき要素であるけれども、どうかするとこれが多きに過ぎて皮脂腺の分泌に異常を起させる、手足で云へば脂手、脂足などと云ひ、常に手掌や足蹠が脂で濕つて居て、裁縫も出來なくなることがある、此變化が顏に起ると顏の皮脂腺から盛に皮脂が分泌されて、充分に外に流れ出ることが出來なくなるから皮脂腺が口を開いて居る毛嚢の内に溜つて了ふ、其處に外面から色々の微菌が入つて來て**ニキビ**と云ふものが出來る、斯ふ云ふ次第であるから卵巣内分泌は**ニキビ**の原因となると云ふことが出來るが、併し年頃に成つても**ニキビ**の出來ない人がある、此人は卵巣内分泌が缺けて居るかと云ふに決してさうではない。こんな人が偶々何々お白粉を用ひて居ると、私は常に何々お白粉を用ひて居ますが、**ニキビ**が出たことはありませんと吹張するので、何々お白粉の名聲が一時に昂つて流行化粧品と成るのであります、此名聲を聞いて**ニキビ**に困つて居る方が此お白粉を用ひて見るけれども一向に其效能がない、さてどうしたも

のだらうと御思案遊ばすと云ふ段取りになるのである。併し此お白粉でニキビの癒らないのは當然の事ではありませんか。こんな例外はどう說明するかと云ふに、卵巢內分泌そのものがニキビと化けるのではなくて、卵巢內分泌の異常ある時にニキビが出ると考へるのが便利である、此內分泌の異常と云ふことは甚だ漠然とした申分で、これが、異常であると云つて指すことは出來ないのである。併し卵巢病や子宮病などの時にニキビが出來る事から考へれば、病變を持つて居る卵巢から出る內分泌は異常であるから、それで以てニキビが吹き出るのだと說明することが出來る、此異常と云ふことは、健康な人の內分泌物とは性質の違つたものが血液の中に送り出されると云ふ事で、例へば神經衰弱の時に臭素劑を飲んで居ると顏や肩などにニキビのやうなものが出來て來る、これは飲んだ臭素が血液の中に混つて、皮脂腺に行つてそこにニキビ(毛囊炎)を起すのである。異常な卵巢內分泌がニキビの原因だと云ふのはこれと同じ道理から考へられた說明でなくてはならぬ。人によると月經の度每にニキビが吹き出して困ると云ふ訴を聞くことがあるのと、閉經期に成つた老人にニキビが出來た例のないことは今此處に申述べたことの有力な證據ではありませんか。併し此處に一つの疑問がある、年頃の時はニキビで困つたけれども三十代になつては少しもニキビは出來ない併し子供が產まれるのを見れば卵巢が無くなつたのではあるまい、勿論卵巢の入更へをした譯でもない若い時分からの卵巢を其儘使つて居ると云ふことである、初めニキビが出來る位內分泌物異常が在つたのだから、此卵巢の在る限りは其內分泌は異常でなければならない、此問題の說明に成ると甚だ怪しくなるので或は卵巢の發育は思春期で終るものではなくて、其後もだん／＼と發育を進めて行くから年頃では異常であつたものが三十代では異常でなくなるのであるとも云ひ、又は卵巢內分泌其ものはいつまでも異常であるけれども皮脂腺がこれに習慣して了

ふから異常な内分泌でも皮脂腺に取ては異常ではなくなるのであらうとも云ふ。どちらの説明も嘘ではないらしいけれども確には断言出來ぬことである。又前に申した臭素劑の内服のためにニキビが出來ると云ふことは、血液の内に在る異常の成分が皮脂腺に害を與へると云ふ事を示す事實である、臭素劑許りではなく沃度劑もさうである、稟賦性の食物を食べるとニキビが出ると云ふのも此道理で説明が出來る。かゝる次第であるから、ニキビは外からの原因で起るのではなくて、身體の内部からの原因で出來るものと云ふことが出來る。これをニキビ原因の自家中毒説と云ふのである。

次に體質變化の一として角化異常と云ふ事が起る、これは皮膚が柔軟の性質を失つて、角の質に化はることで、これにも色々の説明があるけれども、餘り興味のあることでないから此處では申し述べぬ。

次に黴菌説となると今日まで色々の黴菌がニキビの原因として擧げられて居て、痤瘡桿菌とか脂漏小桿菌とか名づけられて居るけれども、これ等は特別の黴菌ではなくて、偶々外方から入込んだものだと云ふ方が正しいと思はれる故に今日では特にこれがニキビの原因菌だと云ふ黴菌は無いと云ふことになつて居る。

以上述べた處はニキビの原因である、初めの内因説が非常に長くなつて龍頭蛇尾に終つて了つたが、私が婦人の方にニキビと云ふものゝ本態を説明しやうとしたのは、特に此内因説を紹介したい考へであつたから、故ら此説明を長くした次第である。次にニキビの療治の事を申し述べ度いのであるが、それは次回に致すこととして、只此處ではニキビは身體の内部に原因があるものであるから、外面から塗り附ける藥だけでは、完全に癒らないものだと云ふことを御承知願ひたいのである。

（以下次號）

育兒

詐病の話

ドクトル　三田谷啓

子供の中には教師又は父兄を詐るが爲めに假病を粧ふ者がある。即ち病氣を自ら作つて或事實から逃がれん事を欲するのである。之れは兒童を取扱ふ父兄竝に教師の爲めに重要な事であるから、玆で其の概要を話しておかうと思ふ。

多くの場合に在りては唯兒童の外見だけで其の疾病であるか否かを知る事が出來る。こどもは熱が有ると云つて大に顏色を紅めて居る事がある。然し此の場合には脈を見、且つ皮膚の温度を見れば發熱の有無がよくわかる。こどもはまた胃加答兒の爲めに工合が惡いと云ふ事が度々有るが是れは舌を見ればよくわかる。若し胃腸の病があれば、舌が白くなつて居る。病氣がないのに詐つて戯れる者は割合に少くない。實驗によると詐病は絶對的のもので無くて病氣を重く言ひ過ぎる場合がある。即ち僅かの事にも重々しく言ふのである。

詐病を分つて次の二つにする。其の一つは自覺的の疾患或は疼痛で、只自己に感ずるのみで兒童そのものにすら全身の狀態が變化した事を充分に知らない場合である。之れが最も周圍の人に取つて判斷に苦しむ者である。實際正確の判斷を下す事は困難である。

第二のものは疾病の狀態を詐らんとするもので、例へば良く目が見えないとか、耳が聞こえないとか或は彼處が痛む此處が痛むと云ふのである。此の場合は醫者は種々の方法を用ゐて判斷する事が出來る。尤も經驗のある人に由りては此の關係を明かに判斷し得らるゝのである。

概して云ふと詐病的の兒童は現在現はれて居る病狀

の最大限を發表するのである。それであるから、時に由ると詐病の子供が詐病する事を忘れて居る事がある。例へば足が痛くて歩けないと云ふて居るが先生や父兄が見て居らねば今迄歩けないと云ふた足で盛んに運動して居る事がある。一足を詐つて病氣だとして居る場合に兒童は病足の左と右とを混同して遂に化の皮が現れるやうなこともある。又こどもの中には少しばかり痛みのあるのを劇痛のやうに訴へるものがある。ヒステリー性のものに往々見らるゝ事實である。

子供の中に次の如きものが居る。卽ち他人から同情を求める爲めに、始終何事かを訴へて居る。かゝる子供は例へば外の人と共に唱歌を歌ふ事をしない。なぜかと聞くと私の肺は弱いからだと云ふ。又翌日になると書取りもしない。其の理由を問へば痙攣が起るからだと云ふ。後には又最早體操が出來ないと云ふ。其理由を問へば關節の工合が惡いからだと云ふ。又かゝる兒童は授業の間に外に出してくれと云ふ。なぜかと問へば工合が惡くなつたからだと言ふ。若し此の場合に兒童の要求が許されないならば中々兒童は頑固である。若し幸ひに其の要求が許された場合は力强く、元氣付き、親切で、精神作用もよく現はれて來るのである。

其の外罰が恐はくて詐病するもの、又實際怠慢であるもの等は先生の性格と關係あることがある、一體病氣を過度に主張する者はヒステリー性を有する者である。子供の中には非常にうそを云ふ者がある。然しそれは生理的に或る時代に於て現はれるものである。卽ち眞實と不眞實とを明確に區別し能はざる爲めである。殊に其の時代には想像の力が逞しいが爲めに、凡ての精神作用は其の爲めに、混同するのである。然し子供のヒステリーの場合に實際詐病の起る事は割合に少ない。

兒童が詐病して耳が聞えぬと云ふことがある。一方の耳だけ聞えぬなどと眞實らしい嘘言を吐くものがある。斯くの如くうそを言つて居る場合には一方の

耳が聞えて見たり又は聞えなかつたりする事が有る即ち兒童は詐つた耳の左であつたか右であつたかを忘れるからである。

視力の障碍を檢して實際詐病であるか否かを試驗する事は困難である。若し詐病者が上手にやる場合には其の判斷は非常に困難である。此の場合には正確な方法を以て檢査する事が大切である。最も容易なる場合は兩方の目が見えないと詐つた場合である。然し之れは實際上稀れである。此の場合に瞳孔の反應並に檢眼鏡の所見が普通で有れば兩眼の見えないと言ふ事は頗る疑はしい。又かゝる兩眼の見えないといふ詐りは其人の氣分を見てもよく判じられる。かゝる人は目を普通ふさいで、如何にも難關を感じると云ふ。本當の盲目であれば目は自由に開らき。そして丁度眞正面を見るか少し上の方を見るのである。

それよりも多く現はれるのは變則の盲目である。永く其の練習をして居るものは中々上手である。これ故色々の方法によりて此の詐りを發覺する事が必要である。一番簡單な方法は小さな文字を兩方の目の中央に置いて讀ませるのである。若し續いて讀むとが出來るならば盲目はうそである。

もつと六つかしいのは變則の視力障碍を詐るか又は程度を過大に訴ふる場合である。此の場合には別に目に異狀を見ずして變則の視力障碍を見る事がある。然し注意して見ると此の場合にも多覺的な兆候を見る事が出來る。之れに由つて一方の目の障碍を知る事が有る。或は種々の距離に由りて視力の試驗をなして其の詐りを發見する事がある。此の事實は徵兵檢査等に於て往々之を目擊するところである。

癲癇の患者が詐病する事は可成り多い事である。然し其の遣り方がまづい爲めに發覺する事が有る。又癲癇を粧ふ爲めに癲癇の眞似をする者があるが、充分知識の無いために外人から其の詐りを發見される事がある。是れと同じ關係で精神病者を眞似る事も有るが、大抵の場合には發覺される。精神病者を眞

似て人を詐ろうとする者は甚だ稀れで、之れは永い間持續する事が中々困難である。健康な者では迚も出來ない。通常の者は普通こう考へて居る。即ち精神病者は何事に由らず人と反對な事をすれば差支へないと思つて居る。然かしそんな事をすると發見される。茲に一つの例を擧げると一婦人が夜ベットに就いて、そして自分は五ッの耳と五つの目を持つて居る。鼻の重さは五斤。指は二十本も有ると云ひ。家の鍵を見てこれは時計の鍵だと言ひ。二を四倍して六つになると云つた。數日又は數週以前迄健康で有つたものが俄かに字が書けなくなつたり、讀めなくなつたり、物の名や、故郷を知らずになるとか、くだらぬうそを云ふ事は詐病の發覺を容易ならしむるものである。

水泳の注意

水泳は遊技として將た武藝の一つとして男の兒には是非習得させて置きたいものであるが、健康上にも頗る佳良の影響を呈するものである。全く着物を脱して空氣と光線を充分に浴びるだけでも健康上に有益であるが、更に水中に入つて全身を自由に運動せしめ、四肢を平等に働かしめる。のみならず水泳は他の遊技に比して比較的早く上達するもので、これが又精神上に少なからず好影響を及ぼすものである。併しながら兒童は兎角無法なことをやるもので、此點に於ては他の遊技よりも水泳には危險が多いから養育者に於てよく／＼注意する必要がある。

第一には充分信賴し得べき師範の監督指導の下に練習させなければならぬ。何によらず遊技、殊に武藝に屬する事は、最初良い師匠に就て稽古しなければ進歩が遲いのみならず、自己流では幾年勉強しても物にならぬ、實に卑しげな惡癖のみ發達するものである。又種々の危險が伴なふものである。特に水泳は兒童のみで勝手にやらしては危險であるから、少なくとも遊泳の達者な大人が附てゐなければなら

ぬ。實はそれよりも前に、此の兒は水泳などをやるに適して居るか、殊に心臟などに異常はないか、又耳の内が惡くないか、鼓膜に孔があいてゐないか等のことに就て醫師の診察を受けるのが安全である。近年は大抵の水泳場でも餘程衞生的の注意はするやうになつたもの〻實際まだ〳〵不行屆であるから、兒童等には堅く水泳場の規則を守る外に、自分で出來るだけ衞生的の注意をするやうに訓戒することが必要である。

海でも河でも十五歳以下の兒童は一回十五分間以上泳いではならぬ。水に入る時には必ず唾液、殊に油を耳につけて水を防ぐこと。濡手拭で全身を濕し、或は胸だけでも濡手拭で濕した後に水に飛込むこと。水から上つたならば清潔な水を以て顏面や頭部をよく洗ひ、全身を拭き乾かし、尚ほ家に歸つてから湯に入り或は行水を遣ふこと。空腹時又は食後二時間過ぎぬ間は水泳せぬこと。大體この位の事を守るやうに言ひ聞かせて置かなければならぬ。

まだ何うやら泳ぎ得る位の時は、自分でも餘り危險な事をせず、監督者も氣をつけて居るので、容易に過はないから、主として細かい衞生的注意を與へれば效が多い。然るに稍や上達して來て、大抵の河位は泳ぎ通せる、五六間は水の中を潛り拔けることも出來るといふ程度の時が一番危險である。それも泳ぎなれた勝手の分つてゐる河とか海ならば宜しいが少しく自信が出來て水を恐れなくなると、何處でも飛込んで泳いで見たくなる。今迄河だけで練習してゐたものが初めて海で泳ぐことになると、淡水と鹹水とでは比重の關係、特に波の具合が甚しく違ふので、餘程泳げると思つたものも丸で泳げない。波を被ぶる、鹽水を飲むといふわけで、危險に遭遇する。これと反對に海ばかりで泳いでゐたものが、偶々河や湖水などに飛込むと、これまたひどく泳ぎにくい、何となく水が重く硬く感じて自由がきかず、流が邪魔になつて苦しめられる。のみならず所々に巖が在つたり、渦卷が在つたり、往々巖の下に深く洞穴の

やうに水の吸込まれる處が在たりするので、海よりは遥に危險が多い。又沼や湖水には地底から非常に冷たい水の湧いて居る處があつて、急に斯樣な處に泳ぎ入ると忽ち彼の恐るべき腓腸筋痙攣を起して自由を失ひ、或は藻の爲に絡まれて動きがつかなくなつたりして危險に陷ることがある。斯樣な事は正式の水泳を習へば勿論心得て居るのであるが、兒童は容易に左樣な事は忘れて仕舞ふ、興に乘じては如何なる冒險もやる、又實際多少冒險的の事でなければ面白がらぬのであるから危險である。樣子を知らぬ河や沼で泳ぐ事は嚴重に戒めて置かなければならぬ。水泳中に溺れるのは、未熟のものよりも多くは河童の河流れである。泳ぎ自慢の兒童には充分訓戒を與へなければならぬ。

尚ほ水泳術に關する種々の心得は、實際其道の人に就て學ばなければならぬが、茲には只前にも述べた通り、兒童の水泳に由て起す所の普通の危害を避けるやうに希望するに過ぎない。それで第一には水泳の後に全身を清水で洗ひ、充分拭乾すこと、殊に眼をよく洗ひ、耳の內をよく綿で拭き乾かすことだけは是非勵行させなければならぬ。水泳の爲に外聽道の癤腫、又は中耳炎、結膜炎等を起す兒童が頗る多い。僅かの注意に由て防ぎ得ることであるが、兒童はなか〱自分で實行するものでない。これは宜しく父兄に於て監督する必要があると思ふ。

寢冷え

夏になりますと、昔から寢冷をしてはならぬと云ふことを、よく申します。殊に小兒に於ては、夏の病氣は皆寢冷が原因になるかのやうに警戒せられますそれも尤もな譯で、夏季には消化器障碍が最も小兒に多い、而して小兒が寢冷えをすると、よく腹痛、下痢を起し、その爲に衰弱して種々の餘病を起すやうなことが屢〻あるからであります。

寢冷えと申しますと、御承知の如く、午睡のとき或

は夜間睡眠中に蒲團を跳除け、素肌を露はして居るやうな場合に、眼を覺して見ると、鼻が詰まつて、何となく頭が重く、全身に違和を覺え、往々輕い腹痛があつて下痢を來す。これが先づ普通所謂寢冷の症狀で、つまり睡眠中に起つた寒冒であります。大人はこれが爲に重い病氣を惹起すやうなことは餘りありませんが、小兒になりますと、その爲に第一機嫌が惡くなり、下痢を起し、熱を出し、食慾がなくなり、引續いて消化器の具合が惡くなり、衰弱することが少なくないから、實際これは用心しなければならぬことであります。

然しながら寢冷の用心と云ふて、妄に綿入の寢卷を著せて、その上に蒲團を掛けるやうな方法は正當でありません、否、斯樣なことをするから却つて小兒は寢冷をするのであります。法外に温かくされますと、小兒は容易に汗を出し、睡眠中にも不知不識蒲團を跳除け、或は拔出して、寢卷を脱ぎ或は胸や腹を露出すもので、直ちにそれが寒冒の原因となる、殊に寢室の戸障子を開け或は隙かして置く場合に、夕立が來るとかいふやうな、急に空氣の冷却するときには容易に寒冒にかゝるのであります。

それで小兒の寢冷を豫防致しますのには、むやみに寢卷をくゝりつけて、蒲團蒸にするのは間違つた仕方で、斯樣なことをすれば、小兒は熱苦しいので熟睡が出來ず、それだけでも弱りますのに、前述の通り。熱過ぎるから却つて裸になつて寢冷をするのであります。概して寢室は稍々温度の低い方が眠心地の好いものでありますが、特に夏分は、なるべく涼しいやうに致しませんと、小兒は衰弱致します。故に寢室は直接に風が身體に當たらないやうにさへすれば、雨天の外は適當に窓を開けて置いた方が宜しい、又蒲團や寢卷も決して小兒が發汗する程著せてはならぬ、寧ろ彼の金時が掛けて居るやうな胸と腹だけを隱す腹卷をさせて、そのまゝ蒲團の上に寢かす方が良い。若し天氣の具合で少し寒いと思ふ時には輕い著物又は木綿を被せた一枚の毛布を掛けてや

れば澤山であります、熱過ぎて、汗を出して蒲團から拔出すよりは、寧ろ少し寒くて縮むだ方が寒冒を引かぬものであります。

右は普通寢冷の用心についての話でありますが、更に根本的に寢冷などをしないやうに致しますのには適當の年齡の小兒には冷水摩擦を行はしめることであります。五六歲以下の小兒は注意して屢々裸にして、直接空氣に皮膚を觸れしめて強固にしますならば、偶々夜間睡眠中に膚を露出しても、それが爲めに寢冷するやうなことはありません。大人でも夜間睡眠中に知らず識らず著物を蹈脫で寢冷をすることがありますが、故意に全く衣服を脫して靜に横はつて試みますと、漸次皮膚の表面が冷えて參りまして殊に胸部及び腹部の皮膚が冷え、腹が鳴り、不快に感じます。實際輕度の腹痛を覺え、下痢を催すやうにもなります。此時眠むつてしまへば無論寢冷で、寒冒に罹りますが、多少不快を覺ゆる時に兩手の手掌を以て胸部から腹部にかけて充分摩擦致すのであります。これは二回ほどづつ二晩も試みますならば既に三日目の晩には、餘程寒くとも腹が鳴つたり、下痢を催すやうな氣味は起らなくなります。況んや睡眠中に誤つて、膚を表はした位では、決して寢冷だの寒冒だのと云ふことは無くなります。何人にも斯樣な事を敢て御勸め致すわけではありませんが、皮膚は少しく習慣さへつければ、隨分強くなり、寒溫に對する調節機能も完全に行はれるものであると云ふ證據に申上げたまでゞあります、兎に角斯う云ふものでありますから、小兒の皮膚を強固にして寢冷や僅かの外來の刺戟に由て起るやうな病氣を豫防することは、少しく注意して鍛練せしむれば敢て困難なものではありません。元來薄弱な小兒に對しては餘程手加減をしなければなりませんが、健康な小兒に對して少しも鍛練強固の道を講せず、徒らに無益の保護のみに努めて、心身を柔弱にせしむるのは愼むべきことであります。極端に至つては何れも、その害を免れませんが世間一般、就中上流の家庭

にありては、小兒を荒く鍛へ過ぎて健康を害し或は發育を妨げると云ふよりも、殆ど總て室咲の草花を育てるやうな調子で、軟弱に過ぐる憾があります。それで一寸溫室の外に出して、僅かに風雨に當てゝも、少しく日光に強く照らされても忽ち萎凋してしまふのであります。寢冷も、戶障子を締切つたり、蒲團にくるむことに依て防ぐよりも、寒さや風に冒されぬだけの抵抗力を養つて防禦する方が正式の衞生であります。

家庭衞生

飼猫に就て

猫は一種の玩弄物として娛樂的に飼養されますが、これが又生來の捕鼠業者であると云ふことは何人も御承知の事で、娛樂的の方面に於ても、實用的の方面に於ても家庭衞生と密接の關係を有して居ります娛樂的に飼養するのには、その種類、毛色、大小等種々の品評すべき點もありませうが、主として衞生上より觀察致して見ますと、第一に猫は他の動物の如く餘り臭氣がない。糞尿も一定の場所にする。外に出しさへしなければ常に淸潔になつて居る、外に出さなければ蚤及び腸寄生蟲なども餘り附かない。飼養法が他の動物よりも簡單で、よく人に親しみ、殊に兒猫の間は、その嬉戲のが面白いので愛養されるのでありますが、隨意に戶外に徘徊することになりますと、衞生上決して安全な飼物とは申されません。犬ほどではありませんが、猫も戶外に於ては不潔物を漁ります、例へば流し下の魚の頭や骨のみならず、塵埃箱の中にも這入ります。而してその足で以て疊の上に、否、奥樣の御膝の上にまで登つて參ります。その鼻尖を以て臺所の總ての食器を嗅ぎ廻ります。お孃樣や若樣に抱かれ、撫られ、往々顏を擦つけて可愛がられます。然るにその四肢には何か

附著して居るか分かりません。毛の間には無數の蚤が居ります。これは勿論猫蚤といふて人蚤とは種類が異りますけれども、往々一つ二つ暫時人體に移ることがあります。斯樣なことを考へますと、衛生上種々の危險を齎らすことは明かであります。西洋風の室、西洋風の臺所ならば、猫を外に出さぬことも內に入れぬことも容易で、縱令出入を許しましても猫の歩いた疊の上に坐るやうなこともなければ、猫が鼻をつけるやうな處に食器も置きませんから、殆ど差支はありませんけれども、日本室、日本臺所では餘程氣をつけなければならぬ事と思ひます。

次に捕鼠者としての猫は、實に先天的の適任者で、これに及ぶものはない。畑などを荒す野鼠に對しては狐、狸、梟、蛇等の如き鼠捕の名人も居りますが家鼠に對しては猫の如き適任者は他にありません。「ペスト」は主として鼠より人に傳染して來る病氣で「ペスト」の豫防撲滅には是非鼠を退治しなければならぬと云ふことの明かになつた今日、猫は娛樂的の飼獸としてよりも、衛生上に有益なる動物として一段の價値を高めたわけであります。

埃及では昔、猫を大切にして、神樣の如く祭つたことがあり、希臘でも猫の保護に關する法律を設けたことがあります。これは穀類や家具等を損害することの甚しい鼠を退治する功勞に由つたものでありませうが、實際鼠の害は驚くべきもので、英吉利では一個年に鼠の爲に蒙むる所の損害高は、金に見積れば一千五百萬磅、北亞米利加では三千五百萬弗、佛蘭西では一億五千萬法、獨逸では二億萬馬克と云ふやうな計算が出て居ります。日本では鼠一匹一日の食料を五厘とし、全國の鼠の數を大約人口と同じ位として計算して見ますと一年には八千八百萬圓ほどの損害になると申しますから、更にこれに貴重品其他の損害高を損害賠償要請的に見積りましたならば實に莫大の損失と云はなければなりません。鼠は經濟上既に斯の如き有害なる動物であるが上に、衛生上に於ては旋毛蟲の本家であり、「ペスト」の親元で

あり、其他種々の危險な病原物などを家の內、特に臺所などに撒布する所の眞に惡むべき動物であります。然れば別に給金も取らずに、熱心に且つ巧みに捕鼠事業に從事する所の猫は大なる衛生上の功勞者と申さなければなりません。彼の有名なコッホ博士が本邦に來遊された節にも盛に飼猫を奬勵されました。

然し玆に一つ熟考を要することは、何時もながら普通の日本家屋の構造であります。西洋風の家屋ならば、殆んど何の心配もありませんが、所謂木と紙で出來て居て、內には疊といふものを敷いて、素足或は足袋で歩き、又人が座わる處になつて居るのでありますから、外を歩き廻つて來た猫が、その足で同じく歩き廻る。何が著くか分かつたものでありません。これは既に前にも述べた所でありますが、「ペスト」豫防撲滅と云ふ點に於きましても、猫は決して鼠を戶外だけで食ふものではありません。外で捕へたものは大抵家の內に持つて來て、座敷中玩具にしまはつて後食ふものであります。健康な鼠でも腸管などの出掛つたものを疊の上に曳ずられてはたまりません、況や若しそれが「ペスト」に罹つてゐる鼠でもあつたならば、それこそ危險至極で、「ペスト」豫防どころではない。それで合理的の最も自然的の「ペスト」豫防策も、現在の日本家屋に於ては一寸考物であらうと思はれます。然し猫が居れば家の內に鼠は出ませんから、なるべく捕鼠の拙劣な猫を只鼠威嚇に飼つて置て、なるべく外に出さぬやうにするが宜しからうと思ふのであります。何れの點から考へても、厭なものでありますが、特に衛生上に於ては、此の疊と云ふものほど厄介な物はありません、私は斯んな物を取除いてしまはぬ限りは、到底家庭衛生も何も有つたものでないと思ふて居ります。

下痢患者の取扱ひ方

これから暑中は一般に消化器を害することが多く、

急性の胃腸加答兒を起す人も少なくない、殊に小兒は非常に消化器を侵され易く、中には疫痢などと稱する危險千萬のものもあり　大人にしても赤痢や虎列剌の如き猛烈なる消化器性の傳染病があるから申迄もなく、罹からぬやうに充分注意しなければならぬが、その心得に就ては他の欄にお話があることと思ふから　茲には全くそれを略して、單に下痢患者の生じた場合の一時の取扱ひ方に就て一言したいと思ふ。

下痢と云ふてもその強度に種々の差異があり、又虎列剌でも下痢が起れば、單純の腸加答兒でも下痢が起るから、もとより一樣の取扱は出來ぬが、醫學の素養が無い人でも、重いか輕いか、性質の險惡な下痢か、左程心配すべき下痢でないかと云ふ位のことは大抵見當のつくものである。非常に烈しい下痢で、顏貌なども見る／＼變化するやうな場合には勿論直ちに醫師を招くに相違ないが、極めて性質の惡い虎列剌、疫痢などは却つて餘り下痢を起さないやうな事があるから氣をつけなければならぬ。斯樣な一刻も猶豫の出來ぬやうな劇症は別として、兎に角一家の内に下痢する者が出來たならば縱令輕症と思つても患者は安靜に床に就かしめ、食物を禁じ、腹痛あらば手拭を熱湯に浸して腹部を溫めて宜し、場合に依ては芥子を貼るも宜し、而して甚しく渴くときは少しづつ水を與へても差支がない、便所は健康者と別にするか或は便器を用ひしめ、少しにても傳染性の病氣ではあるまいかと云ふやうな疑があれば勿論便器は每回嚴重に消毒しなければならぬ、便所も同樣である。而して斯樣な時には病人は晝でも蚊帳の内に置くべきである。即ち蠅の出入を防ぐに妙である。この蠅を防ぐと云ふことは傳染病の場合には極めて必要なことである。如何なる種類又如何なる程度の下痢であつても、兎に角差當り全く絕食させることが肝要である、別に腹痛でもない場合には往々絕食しては身體が衰弱すると稱して、食物を強ひて與へ、粥と梅干ならば差支ない、或は却て樂で

あると唱へて食べさせる、而して容易に治癒すべきものを往々重くすることが頗る多い、一日や二日絶食しても決して衰弱を憂ふるに足らぬ、病氣さへ治癒すれば、忽ち恢復するものであるが、消化する力を失なつて居る、或は加答兒を起して居る腸の内に食物が行けば、第一に腸が動くだけでも宜しくないそれに腐敗醱酵を起すから益々害があるだけである。只下痢すれば全身の水分を多量に失なふから、渇く、これには少量づゝ水或は葡萄酒などを混せて與へて差支ないが、冷水を一度に多量に飲ましむるときは、反射的に腸が動き出すので、腹痛下痢等の症狀を強くするものである。

小兒の下痢に對しては、特に飲食物を嚴禁し、便は必ず便器に取つて、可及的速かに小兒科專門の醫師に診察を受け、總て醫師の指圖に從ひ、或は相談を得て看護しないと甚しい過を來し易い。小兒の病氣に就ては、何れの病氣でもその傾があるが、殊に急性の消化器病になると、親の愚癡なるが爲に殺して仕舞ふ場合が實際に多い。小兒の急性の病氣に就ては、餘り家庭に於ける取扱ひ方を述ぶるよりも、可及的速かに醫師の診察治療を受けよと言ふた方が安全であると思ふから、他は總て略することとする。

小兒でも大人でも、下痢の場合に下劑を用うるのは、大した害も招かぬが、なまじひに止痢劑を用うることになると、往々合理的の療法を施す妨となることがあるから、妄に下痢止の賣藥などを服用することは不利益である。

抄錄

夏の飯

昨年の夏、第十一師團の軍醫部が野外演習中に飯の腐敗する時間を試驗したるが、今回、偕行社より發表されたるその研究成績の要點を紹介すれば次の如し。

發表された其要點は（一）火を強くして炊いた飯は腐れにくい、從

つて燃料は炭より薪がよい、瓦斯は火力は強いが味は薪で炊いた方がうまい(二)水は河の水(水道)より井の水が永持ちする(三)軟かく炊いた飯より硬い方が持ちがよい(四)梅干を入れて炊くと。

▲防腐劑の働きをする、次に米の種類によつて試驗した結果によると燃料は薪な用ひ水は井の水で炊いたもので、白米の飯た多少臭氣がつく迄に十八時間三十分かゝる臭氣と云つてもこの程度は味に變りなく普通の家庭で食べられる位のものである麥飯は十八時間白米に防腐劑の「サルチルサン」を入れて炊いたものは二十時間。

▲玄米飯は二十一時間五分持つ　それから更に變敗の程度が進んで飯粒に斑な浮べる迄の時間を計つて見ると白米飯が十九時間五分、麥飯が十九時間三十分、防腐劑を入れた白米飯が二十一時間五十六分、玄米飯は二十五時間二十分である、然しこの程度は從來演習地などで兵卒が食べても害の無かつたものを標準としたのである。

▲要するに此研究の結果はどうしても玄米飯が一番永持ちする、白米飯は防腐劑を入れても持ちの上からは到底玄米に及ばぬ事が證明された既に現在牛搗米を川ひて居る軍隊は少くないが近來は更に一歩進めてかく玄米食の研究に熱心して居る師團はぼつ〳〵出來初めたそして。

▲榮養如何の問題は先づさて置いて永持ちのする點から見れば玄米は軍隊に都合のよい食物であると云ふ事である。

梅干の殺菌力

二木博士の談なりとて梅干、澤庵漬、糠味噌、醋醬油等の殺菌力に關する話を婦女新聞に載せあり、左の如し。

安全な夏季の食物として日常用ひる食物の中で梅干が最も殺菌力が強いのです。梅干に附著した窒扶斯菌は二分間で生育を衰へしめ五分間で全く殺菌せらるゝ效力を以て居るので、昔時水戸黄門は軍用として庭園に梅林を植ゑたといふ事から見ても梅干は食料中如何に重要されたのかゞ判るでせう、又日本特有の澤庵漬にも強い殺菌力があります、澤庵に附著した窒扶斯菌は七分間乃至十分間で殺菌され尙ほ澤庵の中には米のやうな澱粉質を消化する酵素を澤山含有して消化を助くる效があり糠味噌は不潔のやうに思はれますが之も殺菌力を有し窒扶斯菌などは一時間乃至三時間で漸次減少して生育力を失ひます、飲料中で殺菌力の強いものは酒で一時間乃至三時間で無菌となり、甘酒や牛乳なども冷却したものに菌が混入すると四晝夜以上も生育を保ち酢の中では十分間で殺菌しますが醬油の中では三晝夜位生存し刺身に附著したる菌は三晝夜以上を保ち刺身に附き物の大根おろし山葵おろし等も四十八時間生存しますから刺身は餘程清潔に拵へたものでないと危險で、夏向は刺身よりも酢の物が安全であります

女子の肉體美

婦人公論に掲載されたる、醫學博士文學博士富士川游先生の女子肉體美論の大要は左の如くなり。

ストラッツ氏の說に據れば、正常の身體は大略左の如き比率を有せればならぬ。

(一)身長は頭高の七倍乃至八倍、顏高の十倍、手長の九倍足長の六倍乃至七倍なる事。

(二)顴顬幅は顏高に同じきこと。
(三)上肢長は頭高の三倍なること。
(四)下肢長は頭高の四倍なること。
(五)肩幅は頭高の二倍なること。
(六)前額長と、鼻長と、口長と、耳長と同一なること。
(七)眼裂と、口裂と、顏幅との比例は二と三と五との割合なること。

右の比率を有することは肉體美が成立する條件の一つである。しかしながら、肥滿した身體でも、痩せた身體でも、その比率は、時として、正しいことがあるから、たゞ身體の比率の正しいといふことだけでは眞正の肉體美は出來ぬものである。更に肉體美の第二の條件として、二次性徴の發達を擧げねばならぬ。二次性徴といふのは、男の身體と、女の身體とが互に相異なれるところを示せる標徴で、女子の身體では、女子に屬する二次性徴が充分に發達して居る場合に肉體美が現はれるのである。然らば女子に屬する二次性徴は何であるかといふに、それは大略次の通である。

骨骼の婉美なること。身體の凹味を帶ぶること。乳房の豐隆せること。骨盤の廣き事。頭髮の長く且つ多きこと。腋毛の少なき事。身體に贅毛を存せざること。皮膚の軟なること。頭蓋の凹味を帶ぶること。顏面の小さきこと。眼窩の大なること。眉毛の高く且小さきこと。下顎の小さく且低きこと。頰より頸に移る部の軟なること頸の凹きこと。手の關節の纖細なること。手細く示指長き事。肩の圓きこと。鎖骨の正直にして細きこと。胸廓の細く長きこと。胴の狹きこと。鼠蹊部の空洞を存すること。臀部の突隆すること鼠蹊部に溝を有すること。上腿の太く且圓き事。恥弓の低く鈍きこと。雎腸部の凹きこと。足關節の細きこと。足乾きて拇指の小さきこと。第二趾長くして第五趾短きこと。前門齒の大なること。此の如き、女子の身體の二次性徴が充分に發達して居る場合はその女子の身體は眞正の美を呈するもので、これに反する場合は醜といふべきである。



○女理學士

遂に東北大學に入學されました東京女子高師出身の黒田ちか子(三十四歳)牧田らく子(三十歳)の兩女史は、螢雪三年の功成り、今回芽出度く卒業して理學士になられました。兩女史は實に我國開闢以來の女學士になられたのであります。けれども此の兩女史の後を繼いで大學に入學した婦人が一人も有りませんのは、如何にも惜しい次第では御座いませんか。

○名譽の寶冠章

大正三四年戰役に際し野戰、衛戍兩病院其他で傷病

將卒の看護事務に從事したる看護婦山崎きく以下六百八十名に對する行賞は去る十四日發表されたり。其内勳七等寶冠章に敍せられたるは山崎きく、南條まつ、義村せん、奥平小富、澤村利、橋本治、植松てつ、富川ひで、岡宮かめ、の九氏にして何れも以前に勳八等を有せる人々、又勳八等寶冠章に敍せられたるは角野靜惠、長濱たけ、菅沼慶壽の三氏なり。

○女裝の壯丁

和歌山縣日高郡南部町にては去る九日より十一日まで徵兵檢查執行中、十日髮を蝶々髷に結ひ女物銘仙の單衣に毛斯綸友染の帶を太鼓に結びたる大柄の女がクリーム色の蝙蝠傘をかざし嬌羞をつくりて入場し來るに多數の壯丁を初め檢查官も之は不思議と打守れるが此女は其實男子にて日高郡南部町大字山内西川金藏次男安吉（明治二十九年二月二十六日生）といひ身體檢查の結果身長五尺四寸乙種に合格したるより何れも一驚を喫したり安吉は幼少より身體虛弱にして到底男子の職業に從事せしむることを得ずと見たる父金藏は安吉に女裝せしめ女子の仕事ばかりを敎へ總て女子として取扱ひ居りたるより安吉も全く女に成り濟まして女の兒とのみ遊び十四五歲の頃大阪に出で某織物會社等に女工として八ヶ年間も故障無く勤め今回の徵兵適齡に當りて歸縣したるにて檢查に合格して勇み立ち生れて初めての男の氣分になつたと喜びゐたりと。

廣告

○婦人衛生會例會

本月一日神田區一ツ橋通女子職業學校に於て私立大日本婦人衛生會例會を開きたり、當日は各女學校孰れも試驗中のことゝて僅かに百名足らずの聽衆なりしが、吉岡彌生女史は婦人衛生上注意すべき實際の事柄につき有益なる講話をせられたり、平素の醫學博士、醫學士等の男講師よりも遙かに平易にして、女子の實際生活に切實なるものあり、裨益する

所多大なりしが如し。

右終りて諸役員は別室に於て暫く歡談の後散會せり。出席役員姓名は左の如くなりき。

鳩山春子	濱尾作子	高木鍒子	山口貞子
吉岡彌生	濱田捨子	緒方悅子	天野多喜子
川村請子	山本多穗子	近藤憲子	丹波貞子

（以上出席順）

○新潟支會消息

同支會は去る二十五日地久節祝賀の意を表せんが爲め同市白山公園内偕樂館に於て三婦人會聯合にて祝賀會を開催し、女學校の高田せん子女史開會の挨拶あり次で師範學校長江口氏の祝辭及び講話あり、引續き種々の餘興ありたり、出席者百五十餘名にて盛況を呈し午後四時散會したり。

尙ほ同支會に於ては市衛生會と聯合し七月十五日より九月十日迄、例年の通同市海岸に海水浴場を開設する由なり。

○入會者

●麴町區平河町三ノ一八　宇野彌太郎

○羽田三緒子氏紹介

●赤阪區榎坂町二田家氏方　通常　渡邊多勢子

●同　通常　紀平久子

●同　通常　小池やす子

○新潟支會入會者

○關やす子氏紹介

特別　錦織音代子

特別　北川小絲子

○福田イツヱ子氏紹介

通常　松山琴子

○阿部さき子氏紹介

特別　阿部きん子

○轉居

牛込ヨリ麴町區三番町七一へ　特別　鈴木かず子

同鈴木氏方へ　特別　小川孝子

大阪ヨリ兵庫縣武庫郡西須磨字西野ノ東　山邊定子

四日市ヨリ東京四谷區箪笥町四一原方　新庄品子

小石川ヨリ水戸市大工町秋山方　秋山君子

麴町ヨリ山口縣吉敷郡小郡町新町長井方　杉山歌子

芝ヨリ府下大森山王渡邊國重方　渡邊春子

高知市ヨリ高知縣土佐郡江ノ口町大川筋四二藤井正文方　杉本清美子

私立大日本婦人衛生會役員氏名

總裁 東伏見宮妃周子殿下
會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 男爵夫人 濱尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
同 長谷川仲子
同 岡田德子
同 高木鐐子
同 山本多穂子
同 三浦敎子
同 松平芳子
評議員 入澤常子
同 羽田三緒子
同 濱田捨子
同 服部繁子
同 仁禮壽賀子
同 西升子
同 土肥多越子
同 緒方悅子
同 岡山とし子
同 小川孝子
同 男爵夫人 加藤鈴子
同 片山龜子
同 吉岡彌生子
同 丹波貞子
同 高橋孝子
同 田村きよ子
同 武田宜子
同 鶴原誠子
同 男爵夫人 南部殷子
同 中濱芳子
同 山口貞子
同 子爵夫人 松井正子
同 古市幸子
同 小松いさ子
同 近藤憲子
同 伯爵夫人 阿部篤子
同 天野多喜子
同 岸澄子
同 菊池米子
同 三宅藤子
同 宮本樂子
同 宮下咲子
同 守屋千代子

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金貳拾錢 郵稅壹錢
三冊（三ヶ月分） 前金郵稅共 金四拾五錢
十二冊（一ヶ年分） 前金郵稅共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁 六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金貳圓五拾錢
○特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

大正五年七月十七日印刷
大正五年七月二十日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區駒込千駄木町五十八番地 莊司秋次郎
印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 櫻井新三郎
印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鎗屋町 長明堂
同市本郷區本富士町 明文館
同市同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入 若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本郷區本富士町 盛春堂
名古屋市榮町六丁目 丸善書店

婦人衛生雜誌第三百二十號(大正五年七月廿五日發行) 明治四十三年十二月一日第三種郵便物認可(毎月一回廿日發行)